

第一次国共合作期におけるコミンテルン 軍事顧問の役割 (11)

—А.И. Черепанов : Записки Военного Советника
в Китае—を中心として

滝 本 可 紀*

On the Role of Military Advisers of Comintern in the Period of the First
Kuomintang and Chinese Communist Party Cooperation (11)

Yoshinori TAKIMOTO

Abstract

Two months after the Second Eastern Campaign had ended, Cherepanov handed over his job as 1st Corps adviser to Zilvert, who had been appointed in his place. In 1926 he set out for the Soviet Union via Peking.

He intended to spend a week or two in Peking. But, when he presented himself at the Soviet Embassy, he got the important news that an extremely authoritative commission had arrived in Peking from Moscow to analyse the advisers' work in the south of China and in Feng Yuxiang's armies and to look into the problems of the Soviet Union's assistance to the Chinese revolution. The commission was headed by A.S. Bubnov.

The commission members were mostly interested in the prospect of Northern Campaign by the National Revolutionary Army. Cherepanov stated the viewpoint that in embarking on Northern Campaign, Army would reach the Yanzi River with the relative ease, and after that the imperialist powers would act against the revolutionary forces in united front. He also said that the weakness of the united national revolutionary front lay in the absence of a clear-cut agrarian program.

Bubnov proposed that he went to Yue Weijun's 2nd People's Army in Kaifeng to size up the situation there and pass on the military experience gained in the south to the group of advisers in Kaifeng.

He arrived in Zhengzhou on 26 February 1926. The city was being evacuated. He was unable to carry out all the tasks assigned to him. He was prevented by the hasty and unprepared retreat of Yue's army, and he left for Peking.

Borodin told him that he had to leave Peking before it fell and travel to Canton with a group of Chinese comrades and Borodin. Since it was impossible to travel to the south in usual way, they decided to go by the following route: Peking-Zhangjiakou-the Gobi Desert-Ulan Bator-Ulan Ude-Vladivostok. He was appointed chief of the expedition.

In Vladivostok he put the expedition members on a steamship. After that he wanted to learn about the latest innovations in the Army, "fire company." He watched the field exercise of 1st Pacific Division. He also visited the Vladivostok Infantry School and learnt the instruction process here. This came in handy for the Whampoa School.

He returned to Canton with Blyukher. He was to resume the post of chief military adviser there.

第一次、第二次東征を経て、広東省は国民革命の根拠地となった。この間、チェレパノフは国民党の軍事顧問の役割を果し、交替要員の来華を待って帰国の途についた。彼は1、2週間滞在するつもりで北京へやって来た。然し、ここで彼は又もや中国に止まるはめになった。北京のソ連代表部に出頭した時、彼はそこで最新の情報を得た。国民党や馮玉祥軍にいる顧問達の仕事を調査し、また中国革命に対するソ連の援助に関する諸問題を全般的に研究するための極めて権威ある委員会が北京に来ているということであった。それはA.C. Бубновを委員長とする委員会で、チェレパノフはそれに出席し、そこで国民革命軍による北伐の可能性が論じられた。彼は、国民革命軍は長江までは比較的容易に進撃することができるが、その後は、帝国主義列強は共同戦線をつくり対抗するであろうと述べた。また、北伐を進める際、農民を決起させるための何等かのスローガンを出さねばならず、そのための確な農業綱領を持たねばならないと述べた。

Бубновは開封の現状を分析し、チェレパノフに華南で蓄積された戦闘経験を開封の顧問団に伝えるため、そこにある岳維峻の国民第二軍の所へ行くよう提案した。

1925年末、馮玉祥の国民軍は華北で奉天派張作霖と直隸派呉佩孚に対抗し、ある程度の勢力を持つことができ、ソ連側は彼の軍隊に対し援助の手を差し伸べていた。然し、1926年になると、張作霖と呉佩孚の反撃が始まり馮玉祥の国民軍は敗走し始めた。

チェレパノフは1926年2月末に鄭州に到着したが、岳の第二国民軍は撤退中で、ソ連の顧問達も軍の司令部から何の連絡もないまま、戦場に置き去りになる所をやっとの思いで蘭封から歩いて鄭州に辿り着いた。

チェレパノフは彼等を連れ列車で北京へ戻った。北京にも危険が迫り、ここを脱出する必要が生じた。彼は旅行団長として、ボロジン一家と中国人の同志を連れ広東へ行くよう命ぜられた。通常のルートは使えず、北京—張家口—ゴビ砂漠—ウランバートル—ウランウデー—ウラジボストク、そして海路広州へのルートであった。ウラジボストクまでの困難な旅を何とか乗り切り、ここで中国人達を汽船に乗せた。その後しばらくの間、第一太平洋師団の最新の《砲兵中隊》、歩兵学校の教育過程等を实地に研修し、広東での軍務に備えた。そして再び国民党の軍事顧問団長になるブリュー

ヘルと共に彼は船で広州へ向かった。

以下は国民党軍事顧問であったA.И. Черепановの回想録《Записки Советника в Китае》1976、НАУКАの334頁～374頁の全訳であり、これに関して、中国北京市、中国人民大学蔣春声教授に多くの教示を受けたことを記し、ここに厚く御礼を申し上げる。

オールド ボルシェヴィクの目を通して

我々が会見の行われた建物から出て来ると、突然、少年の声と思われる甲高い泣き声が聞こえた。ボロジンの下の息子ノルマンがどこか陰から、血まみれになった指を上にあげて我々の方へ真つすぐ走って来た。Фаня Семеновнаが近くに立っていた。ノルマンはすすり泣き、口ごもりながら、兄のフレッドのことで彼女に不平を言い始めた。兄は何かでうっかり弟の手を挟んだのであった。フレッドは少し離れた所に立って当惑げに苦笑していた。Фаня Семеновнаは彼女特有の決断力で即座に状況を理解し、ベテランの養育者らしく行動した。彼女はノルマンの告げ口を叱った後、指に包帯を巻きに行かせ、その子がドアの陰に見えなくなって初めて、小声でフレッドを叱った。

その後、Фаня Семеновнаは我々に話しかけた：《ボロジンがあなた方に立ち寄りてもらいたいと言っていました。》ボロジンが迎えに出て来た。《こんな恰好ですみません。着換える時間がなかったもので。明日私は委員会で報告することになっていて、一生懸命その準備をしているところです。》と彼は低い声で言った。ボロジンは中国服をまとっていた：それは襟の高い中国服で、広州でもしばしば着ており、肩幅が広く太りぎみの彼の姿によく似合っていた。

ボロジンは自分の書き上げた報告書を、我々に注意深く検討してくれるように頼んだ。《Фаня、みんなをテラスへ案内してお茶を用意して下さい。厄介な委員会の後だから、彼らはきつととてもどが渴いているだろう。》彼は濃い口髭に冗談っぽい笑みを浮べて妻に言った。Фаняはこの数年、ボロジンの秘書の仕事をしており、それも非のうちどころなくその役目を果たしていた。

我々はボロジンが書き上げたばかりの報告書の最初の原稿を受け取り、それを読むためにその場を離れた。言うまでもなく、我々は大きな関心を持ってその一頁一頁を読んだ。中国革命の、嵐のような、時には心を

わくわくさせるような予想外の一連の出来事を、我々はたった今日撃したばかりであったけれども、我々、軍事顧問達にはその歴史的意義を判断することができなかった。我々は事件の真直中において、反革命と武力で闘っており、華南の政治状況全般を眺めやることができなかった。我々は若く、革命闘争に対する経験が充分になく、またマルクスレーニン主義を真に深く理解していなかった。今や我々は映画の一コマ一コマのように我々の心に浮ぶ全ての事を、政治面であらゆる体験を積んだオールドボルシェヴィクの目を通して見る機会を与えられた。ボロジンは広州では偉大な権威を持っており、中国革命に対するソ連の援助のプログラム全体を実現させるための指導を中国南部で行った。それ故、極めて多くの事が事件に対する彼の評価と民族解放運動の見通しに関する彼の分析にかかっていた。

我々は読み終ったページをお互いに奪い合い、議論し、若干の抜粋を作った。広東に革命基地を建設する闘争の過程に対して、ボロジンが示した時代区分には歴史家はきっと関心をいさぐであらう。彼はその過程をいくつかの段階に分けた。

第1: 1923年9月—1924年1月、この間に民族革命に対する国民党の果す役割が決定された。第2: 1924年1月—9月、大衆を運動に参加させ、国民革命軍を創設する段階。《商団事件》を鎮圧した過程を見ると、孫文は必要とあらばブルジョアジーの資産の没収もためらわなかったというのがボロジンの見解であった。第3: 1924年9月—1925年春、孫文の華北訪問と第一次東征。北方に於いて孫文は軍閥達との協定に基いて国民政府を樹立することは不可能であると確信し、死ぬ前に、中国革命にソ連との堅い同盟という考えを遺言した。第4: 雲南及び広西軍閥である楊希閔と劉震寰の反革命的行動に対する闘争は1925年6月12日に終了した。ボロジンはこの両者が国民党中央執行委員であることを指摘した: 《要するにこれは党内の右派に対する闘争であった》第5: 国民党左派が権力を求める闘争をしていた段階。国民政府の形成。指導権を国民党中央執行委員会政治局に集中。第6: 1925年8月20日、反動派工作員による孫文の最も忠実な弟子である廖仲愷暗殺及び許崇智が率いる広州地つきの軍閥軍の武装解除。ボロジンは次のことを強調した。《この闘争で主要な役割を演じたのは沙面射殺事件の後、ストライキを行った香港、広東の10万の労働者であった。》第7段階は陳炯明と国民党右派内の香港の手先との連

合を相手とする第二次東征であった。

ボロジンは大衆を闘争に決起させたことが南方に於ける活動の主要な功績であると信じた。彼は書いている: 《私は一つの歴史的宣言を述べねばならない。6月12日から、まさに敵の最後の敗北に至るまで、広東で成就された全ての事はストライキによってのみ可能であった。もし、香港—広東及び沙面のストライキが無かったなら、全ての活動はあれ程成功しなかったであろう、そして状況も安定したものにはならなかったであろう、と私は考えている。》真のマルクス・レーニン主義者であるボロジンは常に注意を労働者階級の上に集中していた。

中国共産党がその党員数は極めて少なかったにも拘らず、予想をはるかに越える大きな役割を果たしたことはこの報告書から明らかであった。ボロジンは述べている: 《コミニストは常に軍隊内で最も献身的で誠実な活動家であり、いかなる戦役に於いても最も勇敢であった。》

しかし、ボロジンは国民党中央執行委員会及び国民革命政府の顧問団長であった。それ故当然のことであるが、彼の最大の任務は南中国に於ける政府設立の過程及び国民党内部の闘争を解明することであった。革命勢力を強化すること、そして多少とも安定した権力を創ることを目指した執拗な努力に対して、数頁が捧げられている。孫文が無政府状態の混乱と軍閥間の絶えざる争いを克服し、政府と党の機構の基礎を築くのを助けるために、ボロジンはこの地でその手腕を最大限発揮しなければならなかった。この活動の第一段階についてボロジンは次のように語っている。《二人の人間を何らかの手段で結びつけるには必ず、とてつもない困難を伴うものである。広州はバビロンの混乱のような土地で、その中にいると全く度を失ってしまう可能性がある。》

まず第一に将来のことを考えて、個々の将軍及び国民党政治家の相矛盾する利害を多少とも巧みに処理せざるを得なかった。孫文はこの手段を用いても大した効果がないことを、すでに1924年までによく理解していた。事実、彼が数回行った北伐は軍閥達に頼る面倒さから抜け出そうとする試みであった。しかし、それは当時としては成功するはずがなかった。彼の側近のうちの何人か、特に胡漢民は陰謀、待ち伏せ、恐喝等の泥沼にはまり込んでいた。まさにこの胡漢民の周囲にそのように腐敗した国民党員が集まって来た。

ボロジンはより左翼的な国民党員に基礎を置きなが

ら、コミニストと協力し、過去の遺産を根絶し、統一戦線と真の三民主義の旗の下に国民革命の全勢力を結集するために闘った。彼は多くのことを何とか成し遂げた。しかし、後に続く諸事件は彼もまたこの時期の成果を過大視したことを示した。他の人と同様に、彼も《中山艦事件》の可能性を予想することができなかった。彼は自分の報告書に書いている：《許崇智の辞職、梁鴻楷軍の武装解除、胡漢民のモスクワへの追放によって、広州に安定した統一政権に近いものが出現した。7人の兵団長のうち4人を信頼できると考えてよい。(ボロジンは恐らく第1軍長蔣介石、第2軍長譚延闓、第3軍長朱培徳、第4軍長程潜を考えていたのであろう。)彼らと我々とが争いを起こすことは多分ないであろう……この指揮官達と協力して大事業を成し遂げることができるであろう。》我々が知っているように、ボロジンは指名した当時の政治家や将軍達の演説はどれもこれもデマに満ちていたけれども、彼はまさにこの恥知らずのデマにある程度騙されていた。

ボロジンは《孫文学会》(より正確には反孫文とも言うべきであったろう)の危険性を過少評価していた。勿論それと闘う方法は考えていたが：つまり軍隊から反革命的な将校の一部を追放し、その組織を教育的なサークルのようなものにする事等であった。若い中国共産党がこの組織の中で活動を始めなかったことを、ボロジンは党の重大な誤りだと言及したのはもともとであった。

特に興味をもったのは農業問題を解決する立場からなされた革命の展望の分析であった。ボロジンは次のように書いている。《私は個人的に思うのだが、中国全体、特に広東省に於ける帝国主義の最も主要な砦は軍閥ではなく、土地関係、即ち遅れた中世の関係である。》

ボロジンはすでに当時から次のことを充分理解していた。農業問題を解決するための闘争は順調には動き出さないであろう。さらにそれは革命勢力の統一戦線内の内部矛盾の重大な暴発をも引き起こすであろう。彼は書いている。《将軍達を撃破すること、これはそれなりに大変なことだが、土地関係の変更に着手し、税制度の変更に着手すること—これは将軍達を打倒するよりもはるかに困難な仕事である。それを手がけようとした場合、農民の働きの65%を搾取し、それによって生活している全ての階級、全ての社会層の抵抗に必ず会うであろう。》ボロジンは率直に問題を提起した。国民党は農業改革の実行に着手する意志があるのか?彼の意見によると、国民党は分裂せざるを得ず、左

派がそれに着手するであろう。そうでなければ《何も生まれまいであろう》。ボロジンは宣言した。今後は《中国の民族—革命運動は農業革命によってのみ勝利が可能となる》ことを認めるものだけを左派国民党員であるとみなすことができる。

ボロジンの報告書から当然の結果として出てきたことは、この問題で《左派》国民党員を集めることは極めて困難であるということであった。かつてボロジンは孫文に、農民に対して組織する権利を認める法令を出すよう勧めた。後にはまた、賃貸借料を25%削減する法令が用意されたけれども、ボロジンの表現によれば、それは《古文書館に眠っていた》。それにも拘らず革命勢力が強化された今は《左派》国民党員を土地改革に導びくことができるし、またしなければならぬとボロジンは考えた。

ボロジンは報告書の中で、土地問題を解決するためには、現在県長が支配している農村にそのための政府機関を設けることを考えざるを得ないことを立証した。《もし農民組合の組織づくりを続けるなら、地主達との闘争は避けられない。北伐を行う場合、まさにこの問題が湖南にも、広西にも、その他あらゆる所で持ち上ってくるであろう……新しい反帝国主義国家は土地問題の解決なくしては存在し得ない》。彼はそれを解決するための行動計画を平易に表現し、それをスローガンの形にまとめることが必要だと考えた。ボロジンは広東省の農民と地主が衝突した際、国民党左派が武器をもって農民を支援したことに注意を向けた。そして次の結論を出した：《もし我々(革命諸勢力の指導部—チェレバーノフ)が土地改革の準備に着手し、広東省内各地に安定した政府機関を樹立し、北伐を成功させるために必要な準備に着手することを決定したならば、国民党左派は我々を妨害しないであろう。こうなった場合、確かに国民党の分裂を招くであろうが、他に手段はない》。

農地改革を行って初めて真に反帝国主義的国家が形成される。《その国家は不平等条約について列強から単に譲歩を引き出して満足するだけでなく、中国に存在する帝国主義者の経済的権益との闘いを広範囲に始めるものである》。統一戦線の諸勢力及び人民大衆自身の成熟しつつある自然発生的な闘争が革命をこの方向へ押し進めている、とボロジンは指摘した。《我々に未だ用意ができていないことを口実にして、予期したよりも早い農民の登場を抑えることはまさかできないであろう》。

これらのことを前提として、ポロジンは当時急を要したもう一つの問題の解決を提案した。それは国民革命軍の北伐であった。それを実現させるために彼は次のような論拠を上げた。北方軍閥は今や戦争で忙しい。そして英国の帝国主義者は特に呉佩孚が勝利を得た際には、自分の手先を使い彼らを広州に向かわせるために全力を尽すであろう。

しかし、重要なのはこのことではない。広東の統一、軍閥達の粉碎、恒久的な政府機構の樹立、省内財政の安定化の結果、経済が活性化した。ブルジョアジーはまたもや活気づき、金儲けの情熱や例の泡沫会社が彼らを捕えた。(ポロジンはそれを広東のネップと呼んだ。)多くの国民党员は《今や休息の時だ》と心に決めた。

帝国主義者達はこうした気運を考慮した。香港は鉄道建設に借款を供与しようとした。日本は広東省南部の石油開発の権利を設定しようとした。革命陣営に加入しつつあったブルジョアジーはぼろ儲けのためには喜んで民族革命の責務を忘れた。ポロジンは要約した：《広東に止まっていて北伐の準備をしない、これは事実上民族革命運動の大道へ足を踏み入れないことであり、早晚、広東のネップの生贖となり、全ての我々の革命勢力が崩壊の危機に曝されることを意味する》。

しかし、ポロジンは自分の基本的な意見を何度も強調した：《軍閥を懲らしめ、公正な政府を樹立するためのみ北伐に乗り出すのは全く馬鹿げている。《軍閥は帝国主義者の召使いである》というスローガンは広東でさえも、すでに廃れてしまった。そのスローガンで北伐に乗り出すことはできない。北伐のためには確固とした政治・経済の綱領が必要である》。ポロジンは広州に着いたら農業革命を求める闘争のプログラムを作成し、それを南方政府に提示するつもりであった。北伐は孫文がかつて何度か行った北方遠征の様なものであってはならなかった。

解放された地域に政府機関を組織するための原則に関わる問題を農業綱領に従って解決する必要があった。

ポロジンはさらにもう一つの都合な条件を指摘した：湖南省南部にかなりの規模の友好的な軍隊（唐生智の第4師団）が所在している：もし国民党员及び共産党员をアジテーションのためにそこへ派遣するならば、省のこの部分は容易に占拠することができるであろう。

特に注意を払って我々は報告書の最後のページを何

度も読み返した。そこにポロジンは結論を要約していた。彼が革命の諸勢力の主要な任務と考えたのは国民党及び軍隊内での左派の強化、農民の間の活動をうまくまとめること、労働組合の強化とその中に共産党を浸透させること、共産党を質的にも量的にも成長させること、党の力を基本的な任務を解決していくことに集中させること、その任務の一つは北伐を組織化し実行することに参加することである、等であった。

昨今の軍閥の処世術

深く感銘を受けて我々はポロジンの所を出た。ポロジンが述べている極めて重大な問題を静かな所で、もう一度ゆっくりよく考えてみるために、できるだけ早く一人になりたかった。しかし私は呼び止められた。ポロジンが私を家族会議に呼んだのであった。そこでの話し合いは《フレッドをどうするか》ということであった。ポロジンの上の息子が成人に近ずき、どこで教育を受けるべきかを決定する必要がある。ポロジンはフレッドをモスクワの砲術学校へ送るという私の提案を受け入れた。15年後、フレッドはソ連軍大佐として、ドイツ侵略者から首都を守る戦いで戦死した……。

私は考える時間をくれるように委員会に頼んでおいたけれども、私は何ら迷わなかった。好むと好まざるとに拘らず、河南に行かなければならない。それが私の義務であった。出発を待って私は北京で数日を過した。ここで2人の素晴らしい人と知り合いになり、その後変わることはない長年の友人となった。

1926年2月23日、私は北京飯店のレストランで食事をしていた。突然どこか傍で、婦人の声が出た：《この人は失業者の一人よ》

私はどういう意味であるかすぐに解った。中国に滞在中、我々は《ブラウダ》紙上で外国特派員の不遠慮な質問に対する、人民委員会議長長の返答を読んだ：《ソ連の指揮官達は中国軍で顧問として働いているのか?》我々が中国に居ることを否定するのは馬鹿げていただろうけれども、当時の容易ならぬ国際情勢を考慮せざるを得なかった。それ故、返答は極めて外交的な形をとっていた。その中で語られていた内容は次のようなことであった。赤軍は内戦が終結したので、かなりの数の指揮官を動員解除し予備役に編入した。彼ら全員に適した仕事を即座に提供することは不可能だった。このような時に、孫文博士が顧問の派遣をソ連政府に依頼してきた。国家間で他国の専門家を招聘

する際の慣行を考慮に入れて、人民委員会は予備役の指揮官達にその希望に応じて中国で働くために出国することを許可した。我々はこの説明を好意的に受けとった。

無論のこと、我々は党と政府の承諾と許可を得て、祖国の名誉ある任務を遂行するために出発した。我々が出達に同意を表明したのは勿論、国際主義の精神と偉大な中国人民に対する兄弟的連帯感に導かれたものであった。そしてそれ以前、我々が労農赤軍で兵役についていたのは無論のことであった。その時から我々はお互いを冗談に《失業者》と呼び合うようになった。それ故、先刻の言葉を耳にして、それが私のことを言っているのだと解った。

窓を通して眩しく明かるい光線が私を差していた。まるでそれを避けるかのように私は別の椅子に移った。見ると傍で2人の若いカップルが食事をしていた：1人は濃い栗毛色の髪をし、最新流行の服を着た女性で、もう1人は南方人風のやや黒い肌の男性であった。彼らは親しそうな微笑を浮かべた目で私を見た。その女性が彼に一寸と囁くと、彼は面白そうに肩をすくめ、しつこいと思われないように皿の方へ目をやった。今度は私の方がメニューをじっと見始めた。《亡命者らしくはない。——私は思った——だが、大使館でも彼らには出会っていない。一体、誰だろう》

その夜、私は第8回労農赤軍記念を祝う晩餐会のために、大使館付武官である Альберт Лапин (Сейфулин) の所へ出掛けた。私がそこで最初に会ったのは驚いたことに、レストランで私の好奇心を呼び起こしたまさにあの若い人であった。Галина が貴方のことを《失業者の仲間》であると言ったのは間違いではなかった、と外国人とすぐ解るアクセントで彼は言った。そして私と知り合いになり、強く握手した。

この人はブルガリアの革命家、Иван Винаров であった。彼は1922年の末、党の助力で脱獄し、小船に乗ってかなりの距離、黒海を渡りソ連へたどり着いた。ここで彼は指揮官課程を終了し、労農赤軍で兵役を勤めた。そして現在、馮玉祥の国民軍の一兵団の顧問であった。彼の妻、Галина Петровна はモスクワで大使館の速記者であった。初めて会った時、私は彼女が恐らく《ベストウジエフ女子大出身者》即ち、ペテルグラートの有名な女子大の卒業生であると思った。しかし、彼女は女子学習院でより非民主的な教育を受けたことが解った。

その後多くの年月が経ったけれども、Винаров に対す

る私の友情が弱まることはなかった。私は彼らのことを思うといつも、リトアニアの有名な女流詩人、Саломея Нерис の書いた私が入っている数行を思い出す。

予言者の口をして呪わしめよ

存在の不完全性を——

永遠に続く真の友情は存在しても

その中に私の悲しみが刻まれていた。

Альберт Лапин とは、中国では大使館で初めて出合ったが、軍の学校の時にすでに知り合いであった。彼は学識ある、精力的な指揮官で、後に偉大な軍事指導者になった。彼は活動的であり、非常に快活であった。

Лапин の所に10人程集まったが、それは主に顧問達であった。祝賀会は盛大に行われた。我々の若々しい快活さは旺盛で、警句が次々と飛び出した。以前はどういうわけか、2、3人の武官が短期間で交替した。この事に関して顧問の1人がガリッキー侯爵のアリアのパロディーを自作自演した。《もしそのような名誉ある地位が私に廻ってきたら；武官の地位につくのが……》

祝日の後間もなく、私は顧問 Булин と一緒に河南に向け出発した。当時、現在のような完全な輸送機関が無かった。それ故、旅行中、А.С. Бубнов から与えられた任務をより良く遂行するにはどうすればよいかをじっくり考える時間が充分あった。任務に就いている同僚、特に Лапин から得たり、ジャーナリズムから得た、馮玉祥や彼の寄せ集めの国民軍に関する全ての情報を頭の中で思い浮かべた。

出発を前にして、私は張家口や開封にいる顧問団について出来る限り詳しく知ろうとして、あらゆる人にうるさく問い尋ねた。その状況と私がよく知っている広州の状況とはどういう点で異なるのか、また河南の諸条件の下で我々が活動する際、どのようにその方法を変える必要があるのかを理解しようと努めた。

馮玉祥の第一国民軍は当時首都のある直隸省を手中に収め、軍閥の最も強力な2つのグループの間に楔を打ち込んだ：1つは満州の総督、張作霖の奉天派で、日本帝国主義者の意向を受けており、もう1つは直隸派の呉佩孚で、その背後にはアメリカと英国が存在していた。

このほんの少し前、馮にとって軍事状況は素晴らしいものであった。郭松齡將軍が張作霖に反抗して蜂起し、瀋陽に向かって行動を起こした。馮の軍隊はその時すでに遼河に到着していた。しかし、急いで《熱い

うちに鉄を打つ》(これをチャンスに張作霖を倒す)ことが必要となった時、第一国民軍の弱点が全て現われてしまった：その全般的な軍事計画は我々顧問達には隠されており、作戦指導も許されていなかった。將軍自身、本気で戦う気が無く、武器も充分でなかった。

郭松齡は日本の助けで粹砕された。北京に対する重大な危機が生じた。しかし、奉天派は進撃を停止した。この時岳維峻の第二国民軍と吳佩孚の軍隊との間に戦闘が始まった。私はその第二国民軍に向かいつつあった。私が出発する前、北京にある我々の軍事外交指導部は岳の部隊には河南を防衛する力が充分あると思っていた。弱体で独力では行動できない孫岳將軍の第三国民軍はというと、当時主力から離れ陝西省に駐屯していた。第二国民軍も第三国民軍も馮玉祥の直接の指揮から分離された状態にあった。

馮玉祥自身のことは至る所で嫌でも耳に入った。この將軍の極めて明確な、個性豊かな印象深いイメージが私の頭の中に徐々に形づくられていった。馮は他の軍閥とは違っていた。彼は常に自分がとても庶民的で無欲であることを強調していた。

もし、瘦せたやや猫背の蔣介石が進んで革命家を演じ、叫び声をあげてうまくやったとしたら、馮は《百姓の名で》働いた。さらにこれに説得力を与えたのは彼のがっちりした体格、いたずらっぽい目をした丸味のある顔つきであった。張家口のチーフ アドバイザーである В.М. Примаков が私に、馮を見ると《自分自身をも一杯食わず》目から鼻に抜けたウクライナの村長を思い出す、と言った。

馮は張家口に中国最大の毛皮売買の会社の一つを設立した。彼は自分の銀行を持ち、非常に金持の家畜所有者でもあった。こうしたことは彼が大衆そのものの一人であるという役割を名人芸的に演ずる上で妨げにならなかった。彼の演技の見事さを示すいくつかの例を以下に挙げよう。

国民軍は長期に亘る包囲攻撃で陝西省の省都西安を解放した。町は汚れ、至る所に死体が散在しており、それが暑さで急速に腐敗し始め、今にも伝染病が拡がりそうであった。ソ連の顧問団の提案で、有名な土曜日のボランティア労働に倣って3日間の市清掃を行うことが決められた。馮は傍観していなかった。彼は至る所で熱烈な演説をしてこの計画の意義を説明し、それから自ら手製のマスクを付け、シャベルと手押し一輪車を使い、他の全員と同様に焼けつく太陽の下で2日間働いた。

もう一つの場面。馮玉祥は鄭州へ赴きつつあった。最高司令官にふさわしく、彼はボディガードに囲まれて一等客車を占めていた。だが最後の小さな駅で、彼は兵士が常に装備していた兵士用の傘と乾パンの入った小さな袋を身につけ、貨車へ移って行った。鄭州駅に着くと、将校達は将官用の車輛へ突進した。しかし馮はその間に、慎ましやかに兵士用の車輛から出て来た。効果は素晴らしかった。自動車を迎えに出ていた。馮は当惑して言った：《何と御苦労なことか》

馮は兵士達との話し方を知っていた。彼は潼関の峠にある陣地の査閲を行ったことがあった。整列した部隊は甘肅省から来たものであった—馮はその部隊を1~2年見ていなかった。その中には新しい兵士が数多くいた。馮は机の上に立ち上り大声で尋ねた：《私をまだ見たことのない者は誰か?》帽子を脱いだ：《さあ馮を見てみる。》それから、いかに自分が彼らの事を考えているかを述べ始めた。事実、第一国民軍の兵士達は南方の軍隊よりも身なりが良く、栄養も良かった。馮自身、どこにでも兵士の軍服を着て現われた。

彼は全く同じやり方で、住民の機嫌をもとった。自動車に乗ってある町を通り過ぎる時飯を売る大道商人を見ると、彼は立止るように命じた。彼は皿一杯の御飯を盛ってもらい、それを顧問にも同伴の将校にも兵士にも御馳走した。彼らは伝統的な礼儀正しさの精神から断った：《もう済ませました》馮はどうしても食べるように勧めた。こうしたことは何もかも人々に深い感銘を与えた—司令官は普通人の食べ物を嫌がらない……

同じ潼関の査閲の時、馮は数千人の農民を集めるよう命じ、彼らに向かって演説した。ずっと以前、彼が普通の軍閥であった時、すでに陝西省の督弁であった。今や聴衆に向かって次のように話しかけている：《同志諸君、私は当時、諸君のためになることを何もしなかった。当時、私は悪い人間だった。》そして勿論、自らを改めていくことを約束した。

全般的に、馮の演説はその当時、少なからず正しく、且つ進歩的なものであった：彼は不平等条約の廃棄を訴え、またソビエト・ロシアのことを多く語った。しばしば彼は古代の孔子の道徳を鋭く批判し、その倫理と伝統に反対した。(いつまでも続く上辺だけの儀式—挨拶、一定の規則に基く長時間に亘る強制的な接待等々)

良く知られているように、馮はクリスチャンであった。そして軍隊内にキリスト教を普及した。自分の将

校達に一定の道徳を身につけさせようとして、規則を導入した：自分の客を接待するには決められた少額の範囲内にとどめること、面と向かって本当の事を言うこと、上司にプレゼントという形で賄賂を贈らないこと。自分の仲間について、本人が目の前に居る時と居ない時とで言うことを変えないこと、等々。顧問達が軍隊内に政治活動を組織するよう提案した際、馮はそれに答えて、宣教師を指して言った：《この人達が私の政治活動家だ！》

それにも拘らず、キリスト教は馮玉祥の軍隊内に深く根を下ろさなかった。A.A. Лапин は次のような事例を挙げた。ある時、彼は前線司令部を置く場所を探し出すために宿営係の人々と一緒に洛陽へ派遣された。市当局はキリスト教会を借用するよう提案した。恐らく軍隊がしばしば中国の廟に住みつくことを考えたからであろう。Лапин は馮の将校達が宗教の聖物に対してどのような態度をとるか、好奇心をもって観察した。彼らは理由もなく祭壇の上に登り、オルガンをでたらめに弾き始め、あやうく壊すところであった。Лапин は彼らを静めることまでもやらねばならなかった。

一般的にみて、国民軍は矛盾した存在であった。Лапин が言ったように、遠くから見るとある色に見えても近くから見ると他の色に見えることが多かった。例えば、馮の師団の指揮官の中には民衆出身者、つまりかつて馬丁だったりコックだった人がいるということが話題になった。彼らと知り合いになってみて、彼らが皆自分の社会的出身を考えることさえも忘れてしまっていることがわかった。

最も重要なことは馮が自分の支配下にある地域で大衆運動を組織する大きな可能性を提供したことであった。そこでは労働組合員の数は4万人にもものぼり、例えば、労働者達は祝賀会を催すことができ、それには数百人の人々が出席した。共産主義者は国民党员を装って活動し、この合法性という得がたい雰囲気積極的に利用したに違いなかった。

ソ連顧問団側と馮玉祥軍の将軍や将校の側との関係について言うと、張家口と開封とではそれは各々異っていた。

ボロジンはかつて、中国の政治家や軍人と我々との相互関係は3つの段階に区分できると述べたことがある：第1段階では、彼らは他の外国人を見ると同様に、ソ連の顧問を疑いの目を以って眺めている；第2段階では、我々が無欲な、思想的な立場から民族革命を支援していることを彼らは理解し始めている；第3段階

では、我々の政治的助言の価値を認めるようになる。この観点に立つと、南方ではずっと以前すでに、第3段階に入り、第一国民軍は第2段階、第二国民軍は第1段階さえも抜け出さないでいると言える。

無論、どのような思想を持っているか、中国にきた目的は何かに全てがかかっていた。資本主義諸国から来ている傭われの顧問達は中国人に対して傲慢で、軽蔑的な、人種差別的な態度をとっていたので、自分の配下と確固とした関係をつくり上げることができなかった。例えば呉佩孚軍にいたクロウスとか言う顧問が《笑う仏陀の国で》という本の中で大勢の人々に語りかけているのは、東洋の人々と西洋の人々との間には何も共通したものは存在し得ない、また西洋人は中国人の間で、仲間になり得る可能性は全くない、ということであった。我々の方は中国で多くの人々と容易に友人となった。

勿論、南方に於いては革命的な高揚した雰囲気支配的であったので、我々が活動するには馮玉祥の国民軍にあるよりもはるかに容易であった。例えば、馮はかつて、全く突然、引退するつもりだと声明したことがあった。出発を前にして、私は馮のこの意図について実に様々な噂を耳にせざるを得なかった。カラハンはその理由は次の点にあると考えた。第1に馮と第二、第三国民軍との間に不一致が生じていること。第2にもし彼が退去すれば、張作霖の進撃は攻撃する相手が存在しなくなり、故にその意味を失う。第3に(これが主要なものである)、馮は北京の情勢に責任をとりたがらない。A.C. Бубнов 委員会のメンバーの一人である Н.А. Кубяк は次のように断言した。これは馮の側から出された単なるデマにすぎず、実際には彼はどこへも去るつもりはない。単に自分の評判を高めようとしたにすぎない。孫文が1918年、地方軍閥と折り合いがつかず上海へ引退し、その後再び、華南へ招かれたことを馮は思い出したのだ。

ともかく、馮が去るか去らないかに係わらず、北京のソ連の指導部全員は当時、国民軍に対する支援を継続し、充実させなければならぬと考えた。この方針に対して唯一人、だが極めて強烈に反対したのは А.И. Егоров の補佐 Трифонов であった。上記の Бубнов 委員会の会議で、彼は抗議の発言をし、その中で馮玉祥を支持する必要性を断固として否定した。

Трифонов は馮玉祥をありふれた軍閥と見ていた。彼は馮と直隸派との間に不和が生じた過程について、英国の政治評論家や新聞記者に倣って意見を述べた。こ

の単純な図式によると、事件は次のように進展して行った。馮を世間に出してやったのは呉佩孚であった。彼は連隊長を始めとして4万の軍長になった。馮は自分のパトロンと恩人を裏切った。それ故、彼は《面子》を失った。何故なら《彼は儒教的モラルを破った》からである。

当時、馮には自分の良からぬ行為に対して思想的な理由付けをすることしか方法が残っていなかった。Трифоновが以上のことを語っていた時、Лепсеが口をはさんだのは真に的を得ていた：《要するに、馮はイギリス人に気に入られていないのだね》

張家口で馮は労働組合を支配しようとして、その指導者達が仕事で手に入れる給与の何倍かを自分で彼らに支払った。中国共産党地方省委員会書記がこれらの金を党の会計に交付してくれるよう要求した時、馮は自分の代理人に直接渡すことを固執した。

Трифоновは革命運動の前途に対しても極めて悲観的な見方をしていた。1カ月半の中国旅行の後、彼は次の結論に達した。即ち、大衆の活発な進出はただ上海の5・30事件とのみ関連しているもので、運動は《当にならない》ものである。Трифоновは木を見て森を見ないの類とは言え、彼の議論にもいくつかのもっともな、今後の展開の種子はあったのである。例えば、馮の所の顧問達が積極的な行動を起こすことができないことについて、彼は充分な理由をあげて不平を言った。《彼らは持参金の付属物である花嫁のように見られている》と彼は言っていた。

第二国民軍ではソ連の顧問達は主要な陣地の全てに100 露里以内には入れなかった：そこは司令部、作戦指令部、補給基地であった。第二国民軍の中にたとえ多くの国民党員が所属し、またある旅団の司令部にはコミュニストさえいたとしても、その部隊は軍閥のものと同大差なかった。その支配地域は農民暴動にとり囲まれ、それを鎮圧するために岳將軍の全師団を投入していた。軍では掠奪と強盗が横行し、バラバラで歩くのは危険であった。開封にいる顧問団は不信という壁によって現実から切り離され、勝手に放っておかれた。

こうした事実を全て不変なものとして、Трифоновはそこから極めて疑わしい結論を引き出した：第一国民軍が思想的に獲得したものは——《幻想》であり、第二国民軍のそれは《嘆かわしい馬鹿馬鹿しさ》であった。Трифоновが提起したこの考えは狭い独断論やセクト主義の見本であり、現実から切り離された左翼的偽装の見本となり得た。

中国革命の前に立ちはだかっていた課題は民族解放を求める闘争に、全ての同盟者、それが一時的なものであろうと、また当にならぬことが見えすいたものであろうと、それらを引きつけることであった。我々もまたこの事を指針とせざるを得なかった。Трифонов御本人は革命的美辞麗句の陰に、自分が具体的な状況に順応する能力の無いこと、最近の軍閥どもの間で不撓不屈の、報いられることのない活動を行うことができないことを隠していた。

委員会のその会議の席上、政治的により成熟していた同志達がТрифоновの考えを十分検討し、《その中の雑草と小麦を分ける》ことができた。彼に対する回答を与えたのはА.И. Егоровであった。彼は次の事を論拠として、馮に対する援助の継続に断固として賛成した。第1、第一国民軍内の進歩的傾向はすでに確固としたものになっており、たとえ馮が全く運動から手を切ったとしても、軍の一部は革命の側に残り、ソ連との関係は維持されるであろう。第2、我々はすでに馮の軍隊の強化に深く関わっている。第3、我々はどのような条件の下でも、自分達に友好的な隣人達を持ちたかった。

それと同時に、Егоровは顧問団が行った活動に見られる欠点の主要な原因をも、容赦なく指摘した。国民軍に対して明確な政治方針が立てられなかった。国民党左派及びコミュニストを政治活動のために部隊に入れるよう強く主張する必要があったし、また顧問達の任務の範囲を明確にすることも必要であったのは明らかであった。

А.И. Егоровは次のことも指摘した。中国に人員が派遣される時、必ずしも彼らの役割は全面的には決められていなかった。正に1925年の夏、40人が一度に国民軍に派遣された時がそうであった。馮は彼らのほとんど全員を歩兵、砲術、騎兵学校の教育活動の分野に限定して受け入れたが、それ以上は許さなかった。国民軍の天津作戦プランが基本的には顧問団によって作成されたものであるとしても、それを実行する段階では彼らはそれに参加していなかった。А.И. Егоровの提案は、馮が彼の支配下にある勢力を全て自分の下に団結させようとしている計画を支持し、第二、第三国民軍に対する援助は第一国民軍を通じてのみとすること、軍装備の引き渡しのために天津に海軍基地を整備するのを援助することであった。

А.И. Егоровは馮の諸問題を解決する全般的な概要を描き、一方、А.С. Бубновは1925年2月22日に行われた大使館員との会合で、華北に於ける今後のソ連の

行動に関して、深い、明確な、全般的な計画を提案した。

この行動綱領は単に頭の中で考えたものではなかった。委員会は《百聞は一見に如かず》の有名な原則に則って現地で勧告を作成するために、張家口と包頭にしばらく滞在した。

馮の与えた全般的な印象はこのようなものであった：彼は民族—革命運動と共に進むことのできる役に立つ立派な人間である。

馮は包頭の近くの部落で委員会に会った。そこで彼は出発に備え、極めて質素な生活を送っていた。彼はとても率直に会議に臨み、軍の忠誠心を完全に信頼していると声明した。自分がウランバートルにしようとソ連にしようと、軍は自分の言う通りに行動するであろうと述べた。

革命戦線にとって、馮將軍は彼を助けて戦うだけの価値がある人物であるという結論に達し、A.C. Бубновとカラハンは国民軍に影響を与えることが可能な、主要なチャンネルのアウトラインを作り上げた。益々規模を拡大して馮を援助し続けること、またボロジンの様な経験に富んだ幹部を政治顧問として何とか派遣できるよう努力することが決定された。A.C. Бубновの考えは、国民党中央執行委員会は馮玉祥のために、特に若い革命的な基幹軍人を養成すべきであるという事であった。

カラハンは基本的にはБубновの意見に賛成はしたけれども、それを実行する際の極めて大きな困難な点をいくつか指摘した。彼は馮のもとにチーフアドバイザーを直ちに派遣するよう、モスクワに再三電報を打ったが、そこではこのような仕事に適した人物をどうしても探すことができなかった。

国民党は当時、急激に強大化しつつあり、彼らもまた馮に訓練された基幹軍人を送ることができなかった。広州当局は未だ豊かではなかった。それ以外にカラハンは不満を訴えたのは、国民党が馮に対し政治的に臨機応変の行動をとらなかったことがしばしばあり、彼と共通の言語を見出すことができなかった点である。中央委員会が馮のもとに送った人員は充分に権威のあるものではなかった。

委員会の見解では、当時、馮は国民党に対し慎重な態度をとっていた。彼はどのような問題についても熱心に、多方面に亘って論じたが、国民党や政治活動については殆んどしゃべらなかった。それにも拘らず、Бубновが明確に述べたように、彼は《ある程度、民族

—革命運動のイデオロギーを受け入れていた。これは争い難い事実である》。

馮及び国民軍に対して国民党の影響を拡大するための確実な基盤は存在していた。広州の権威は中国で日に日に増大していた。ボロジンは北京に出かけて行き、広州政府に対する社会の各界の代表者の態度を特に詳しく尋ねた結果、彼はこの事を確信した。

以前、帝国主義者のジャーナリズムに目を曇らされたインテリ達は広州がボルシェビキの巣窟であると見ていたけれども、今や、彼らは広東で行われつつある改革を政府が積極的に進行する仕事の興味深く、且つ有益な実験と見るようになった。

Бубновとカラハンを徹底的に支持したのはКубякであった。彼は馮に対する援助計画の拡大が必要であることを特に強調した。

天津付近に手本となるような革命的気質のある師団を創設し、そしてそれによって馮玉祥に対する今後の仕事を著しく軽減させるであろうという考えをカラハンは熱心に主張した。Бубновはこれに異論をはさまず、馮ができるだけ早く軍を直接に指揮するようになるために、あらゆる方策をとるよう勧めた。

委員会との会談で、馮玉祥はソ連の顧問達の仕事を高く評価した。しかしБубновの結論は違っていた。ПримаковとБродеの騎兵隊創設に関わる活動の結果が良好であることは認めなければ、彼の結論は次のようであった。：《顧問達の果した仕事には合格点をつけることは全くできない》。

張家口の顧問達に短期的な目標として次のことが提起された：馮玉祥と一層密接な関係を保つこと、編成及び作戦の処置に通曉すること、参謀としての役割を果し始めること。A.C. Бубновが勧告したのは、顧問の任期を厳密に規定し、休暇を与え、高級軍幹部には標準的な住居条件を与えることであった。—顧問達は兵営に住んでおり、そこでは能率的に仕事をするのが不可能であった。カラハンは《顧問団の教育と指導にはるかに高い評価を与えることができる》と認めた。同時に彼は顧問達が約4ヶ月前天津作戦を前にして、フルに働いたことを指摘し、彼らを守ることが必要だと考えた。今や、活発な活動から彼らを遠ざけているのは反動派の張之江であった。

張は名うての偽善者で、ろくでなしであり、馮の軍隊内の好ましくない要素を全て自分の周囲に集めていた。彼はソ連との結びつきに反対していた。そしてこの事は委員会に対する彼の態度にも表われていた。彼

は形式的、伝統的な丁寧な態度を示しながら、できる限り些細なことまで妨害し、(会う時には30分かそれ以上待たせたり、特別に蒸気機関車を出すと約束したにも拘らず出さなかった等々)張は自分の周囲に宣教師達をおいており、彼らは総督の庭をぶらぶら散歩していた。また彼の応接間には、ゴルゴタの丘で祈っているキリストを画いた絵が一枚かかっていた。

張というこの嫌らしい人物の社会的役割を評価するに当たって、Кубякとカラハンの間に論争が起こった。Кубяkの方は、馮が張に知らせずに軍隊を転進させているという噂から出発して、第一国民軍は《必ずしも全てがうまくいっているわけではない》、そして矛盾が成熟しつつあるという結論に達した。カラハンは彼の意見に反対して、軍の中で馮の命令は全て実行されるであろう、また張が当にしている宣教師達の持つ影響力は一步一步狭まっていると言った。

A.C. Бубнов委員会の北京に於ける仕事は全て北伐を考慮したものと言わねばならない。馮玉祥の問題もまたその実現の可能性を考慮して検討されていた。Бубновの最終的な結論は次のようなものであった：もし半年前に北伐が決定されていなかったならば、そして当然そうであるべきだったのだが、そうすれば、今こそ、北伐に対する諸条件は熟しているであろう。北伐に出動するためには、半年乃至1年前からその準備をしなければならぬ。(カラハンが考えていた期間はそれと異り、1年から1年半であった。)先ず第一に、国民革命軍を平原という条件の下での行動に馴れさせる必要があった。それなしでは、華中の広大な平原に出撃することは不可能であった。

私はA.C. Бубновの勸告が大部分モスクワで是認されるであろうと確信していた。私はБубновが描いた将来に対する見通しには深く感銘を受けた。中国革命の武装勢力が自己の祖国の解放のために、断固出撃する日はすでに近付いた。きっと、若いソ連は極東に強力な何百万もの同盟者を得ることになるであろう。私も仲間と共に、この出撃の準備に参加することになっている！

だが全てはまだ将来のことだ。その前に、重大な任務を果さなければならなかった。Лонгваが提出した委員会での協議資料を注意深く研究することによって、私は多くの事を知った。しかし、私は完全にはそれに納得しなかった。私は委託された大きな責任を益々はっきりと理解し始めた。委員会が新たに指令した馮の軍隊内での任務の実行が私が最初に試みるべき人間

となることになった。Бубновや他の委員達は勿論、私が南方の出撃中に得た仕事のテクニックを華北の同僚達に伝え、それを実行する際の《広州のやり方》を彼らに実地に見せることを期待していた。何とか恥をかかないようにしなければ！

1926年2月26日の夕方近く、私は鄭州に到着した。列車がブレーキをかけ始めるや否や、兵士達が車輛のステップに飛び乗り、押し合ったり罵り合ったりして、乗客達が外に出る前に座席を取りに突進した。彼らが将校の従兵であることが私には解った。市内では撤退が始まっており、彼らは自分の上官の家族を急いで確実に移動させようとしていた。通りは大混乱で騒然としており、兵の隊列は全く見られず、従兵達は荷物を自転車に詰め込み、人力車をつかまえ、それを引いた。

フランス人のホテルで私は顧問達を見つけることができると思っていたけれども、そこで会えたのはただ中国人の通訳だけであった。開封グループの長であるСинани (Скалов)と参謀長のРоллан (А.В. Благодатов)はDeng Bao Sanの第7師団の南方戦線におり、他の者はTian Yu Jieの部隊と一緒に東方戦線にいた。

電信局の局員に賄賂を使った結果、私が到着したことをСинаниに知らせることができた。私は彼の所へ何とか辿り着こうとしていることを彼に知らせてくれるよう頼んだ。

私はある中国人を派遣して状況に探りを入れ、電話で顧問の誰かと連絡がとれるようにしてから(あらゆる所で、開封は陥落したという噂でもちぎりだった)、Булинと一緒に河南の督弁である岳維峻の司令部へ急いだ。門の所に立っている衛兵が我々に、將軍はすでに駅に行っており、開封に向け出発しようとしていると告げた。しかし、將軍は駅にはいなかったことを我々は駅で知っていた。勿論、彼は自分の司令部にいる。我々は戻ってから、副官を呼んでくれるよう要請し、そして彼に通告した：《私は極めて重大な委任を受け、顧問Синаниの所へ派遣されて来たカラハンの代理人である。私は即刻、督弁に会いたい。もし彼が何らかの理由で今私に会えないなら、私は参謀長と話を》

2分も経たないうちに、我々は小さな内庭を通り、司令がびっしり詰まっている部屋へ連れて来られ、それから劉参謀長の事務室へ案内された。私は彼に鄭州へやって来た目的を説明した後、電話でСинаниと協議しなければならぬと言った。

—Синани 將軍は今、どこにいますか。

—知らない。

—ところで、他の顧問達はどこですか。

—それも知らない。劉は続けて言った。あなたが Синани にどんな事を伝えようとしているのか、また督弁とどんな話しをしようとしているのか言って下さい。そうすれば、彼は今すぐ貴方に会うでしょう。

—貴方が私に Синани と連絡をとらせてくれない間は、私は誰とも、また何も話しをしない。貴方は Синани がどこにいるのかつきとめたのですか。

—問い合わせるよう命令している、と將軍は答えた。

それから間もなく、我々は一人の兵に伴われて電話ステーションに出向いた。それは司令部からたつぷり 250 m は離れており、電話線で結ばれていなかった。第7師団は作戦中で、その結果は予想し難いと Синани は伝えて来た。もし彼の方から先に私に連絡できなかったら、私の方から明日 14 時まで電話をかけることを打合わせた。

開封から連絡がなかった。電話交換手は大声で、線が土匪に切られたらしいと言った後通訳にささやいた：《どうも開封は全て敵の手に落ちたらしい》。帰途、我々は開封の事を知るために劉の所へ立ち寄った。その部屋へ督弁自身が入って来た。彼は我々がそこにいることに気がつかない振りをした。

—北京の新しい情報は—と彼は私に尋ねた。

—私は出発前に、第一国民軍が山東攻撃のために天津南方に集結しつつあるということを耳にしました。

さらに以下のような会話が続いた。

—ああ、あの馮の奴！あんなろくでなしの人間を見ることがない、と彼は叫んだ。3軍は一体となって平等の立場で作戦することになっていた。しかし、彼は自分のためにより多くの金や武器を手に入れ、自分のことだけを考えている。今、私の軍はひどく困難な状況下にある。敵は三方から攻撃中で、弾薬はない。

—東方戦線はどうなっていますか。開封は陥落したのですか—と私は尋ねた。

—無論、違う。事態は悪くない。第7師団は南方から東方に転進するよう命令を受けている。これが実施されて初めて我々は攻撃に転ずる。そこの敵は弱い—それはかつての我々の部隊で、呉佩孚に寝返った連中だ。

—あなたはこの転進が何時完了すると思っているのですか。

—今夜。

—師団が現在、作戦中であることに加えて、技術的

な面からもそれはとても無理でしょう。

—今夜でなければ明日の夕方までに師団は目的地に到着するであろう。そしてその時まで東方戦線は持ちこたえるであろう。南部は全く順調である。何故なら、湖北で内戦が始まっているから。

—カラハンは河南で起こっている事にとっても関心をいただいています、と私は言った。彼はこの事態を判断するために、貴方の代理を送るよう求めています。恐らくカラハンは第一及び第三国民軍に対し、自己の影響力を与えることができるでしょう。そうした場合、貴方の状況は良くなるでしょうか。

—派遣することにしよう。全般的に私の事態はそれ程悪くはない。ところで貴方は Синани 將軍に何を伝えなかったのか。

—私はカラハンからのメッセージを持っています。だが Синани に会った後、私はその事について話しましょう。

岳將軍は私と Булин をドアの所まで送って来て、兵士に明りを持って我々と一緒に行くように命じた。

翌日の 12 時頃、私のホテルに劉ともう一人の將軍楊がやって来た；彼らは私と率直に話しをしたいものと言った。私は Синани が帰って来るまで会談を延期したいと提案した。そして状況を知らせてくれるよう頼んだ。

—全ては順調だ—と劉は言った。

—開封は陥落したのですか。

—そんなことはない。

—撤退の場合、諸君にはルートがあるのですか、またその状況はどうなっていますか。

—退却しなければならぬ程状況は悪くはない。

—万一、そうなら。

—そういう事にはならないだろう。湖北では内戦が行われているし、第7師団は間もなく到着するだろう。そうすれば我々は攻撃に転ずるだろう。

—状況がどんなに良いとしても、常に部隊の撤退のためのルートと、後方の陣地を考慮しておかねばならない。

参謀長は口ごもり、沈黙していたが、楊がためらいながら答えた。岳督弁の意図を私は知らないけれども、私の見解では、失敗した場合は鉄道を利用して撤退しなければならぬと思う。その後、我々は2人の將軍が卒業した日本の陸軍士官学校について話した。その1人は確か蒋介石と同じ学年で学んだことを一生懸命強調した。程潜將軍や王柏齡將軍等の人々のこと

も話した。

思いがけず、何人かのソ連の顧問がホテルに入って来た。その中に、参謀学校東方部での私の同級生である通訳のИлья Ошанинがいた。彼らは開封から歩いてやっと辿り着いたのであった。

彼らの様子には私だけでなく中国人まで驚いた：埃りまみれで、髭はぼうぼう、へとへとになり、足には血豆ができていた。私は急いで2人の将軍に出て行ってもらった。一目で全てが明らかになった。——開封が陥落していた。

私は彼らが語った大変な旅行について述べる前に、Илья Михайлович Ошанинと初めて知り合いになった当時のことについて、ここで触れたい。

参謀学校東方部は本科生約20名と研修のために色々なソビエト組織から派遣された若干の職員とをまとめて教育した。当時、Илья Михайловичはひどくやせていた。——骨と皮ばかりだった。教室の中には暖房が無く、コートを着たまま授業を受けた。Ильяはひどく着古した兵士用外套の襟を立てて着ており、机に向かって前屈みに坐って、中国語のフレーズを系統的に暗記していた。彼は漢字の書かれた四角の紙片を片方の手に取り、漢字の形と発音を覚えた。そしてもう一方の手はいつもの癖で、頭の天辺の髪を引っ張った。

彼は我々の所で学ぶと同時に、東方語学ラザレフ学院でも学んだ。猛烈に勉強し、所謂の学問という花崗岩を咬んだ。そしてそれ以外の全ての事を断念した様であった。我々は彼の後について歩道を歩き、彼が歩きながら漢字を復習するのを眺めて、時々面白がった。ほら、あそこで彼は歩みを緩め、止り、考え込むように雲を眺め、それから下を向いて足でアスファルトの上に忘れた漢字を書き始めている。それを思い出すと、満足してさらに先へ歩みを進める。

あの時から何年も過ぎ去った。今や、Илья Михайловичは教授であり、ソ連の偉大な中国語の専門家である。だが、勉強中に頭の天辺の髪をよく引っ張る習慣は、それは残念ながら今ではもう髪というよりはうぶ毛に近いものになっていたが、相変わらず残っていた。

ところで、私は興奮して自分達の悲惨なオデッセイ(旅)を私に語った顧問達との突然の出会いについて話しを戻すことにしよう。彼らが食事をしていると突然、窓の向こうに、将官の自動車が全速力で彼らのアパートの傍を通り過ぎ、その後別な自動車も続いて行くのが見えた。間もなく、通りに人力車、軍の財産を一杯詰め込んだ軍用二輪馬車、隊列を乱した兵士の

群れが動き出した。

事態がどうなっているかを知るために急いでИлья Михайловичが送られた。彼は帰って来て言った：《あらゆる状況から、軍が撤退中であることは明らかだ》。急いで司令部に行ってみると、そこもまた無人であった。近くの家に住人が将校達はこっそり逃げてしまったことを、一生懸命手を西の方へ向けて教えた。

そこで、ソ連の顧問達は急いで何台かの人力車を止め、その半分幌のかかった車の中に身の廻り品を積み込んだ。蘭封を脱出したのは我々が最後だった。町の外で彼らを待ち受けていたのは思いがけない出来事であった——南から接近中であった敵はすでに、道路を射撃区域にしていた。どうすべきかを考え始めた。Ильяの妻 Катяが思いきってやってみようとして断固として言った：《敵が突入する前に出なければならぬ》。幸運にも、銃火の下で無事に走り抜けることができた。暗くなった。顧問達は薄暗がりの中に、道が互いに500m離れた2つの村の間を前方に走っているのに気がついた。村から誰かが銃を乱射し、お返しに道路から何回か大砲の一斉射撃の音が響いた——あたりが全て静かになった。自分達は味方から切り離されたのではないだろうか、敵に包囲されたのではないだろうか、と彼らは心配し始めた。全員が再び前進し始めた。撤退中の砲兵連隊が《赤い槍》を砲撃したのであった。——これは農民自衛組織で、当時、河南には数多くあった。顧問達は無事に危険地点を通り過ぎた——多分、暗闇の中で攻撃した連中は人力車を移動中の砲と誤認し、これ以上射撃するのを踏ったのであろう。

翌日、顧問達がある村へ近付くと、また撃ち合いの音が聞こえて来た。途中で彼らに合流して来た兵士が彼らの不安を一掃した。《これは射撃音ではない—彼は説明した—祭りのおもちゃの鉄砲の音がしているのです。村では新年のお祝いをやっています》。

またもや不幸が。グループの長であるП. Силин(Акимов)が病気がかかり、力尽き、足を傷め、歩いて旅を続けることができなくなった。その兵士が苦境を救った。彼は村で一輪車をやっとのことで手に入れた。Силинはそれに乗って開封まで辿り着かざるを得なかった。顧問達は撤退中の部隊に、町からわずか20kmの所で追いついた。そこで彼らは警備隊に止められた。Ильяは一輪車に坐っているСилинを指して、彼が誰であるかを将校に説明した。その将校が顧問団長の選んだ異常な交通手段に驚嘆したかどうかは解らないが、とにかく、彼は命令を出した。そして彼の兵士達は莊

重にライフルを取って《捧げ銃》をした。

蘭封から開封まで約140～150 kmあった。顧問達はこの距離を2昼夜と少しで踏破した。それは文字通り Суворов の強行軍を実行したことになる。

顧問達が蘭封の司令部に見捨てられ、見殺しにされ、危い所で軍閥達的手中に陥りそうになったのは何故か。ソ連の同志達を第二国民軍の軍務に呼んだのは進歩的な気質の將軍胡景銓であった。しかし、彼らが到着する少し前に、胡將軍はたまたま足に怪我をし、それが膿み始めた。彼はアメリカ人の医師の所へ行き、明らかに命を落とすような《治療を受け》死んでしまった。代って顧問達を受け入れたのは岳維俊將軍であった。彼は軍事に関しては全く知識が無かったが、自惚だけは強かった。彼は軍を組織し、軍事作戦を行う際に、ソ連顧問達の豊富な知識や経験を利用しようとはしなかった。華南でソ連の顧問達が行ったような機能はここでは開封グループの中の一人 Зимин によるのみ果されていた。彼は《自分の》將軍と適切な関係をつくり上げていた。それ以外の顧問は全て訓練課業のみ参加が許された。

岳維峻は顧問達をソ連からの武器や補助金の納入に追加されたいまいましい付録と見做していた。この將軍の政治的、知的見識は極めて狭いものであった。顧問達は第二国民軍司令官の無知を証明するいくつかの滑稽なできごとを私に語ってくれた。

將軍が初めて顧問達を自分の所に迎えた時、なにげなく言った。自分はアメリカの女性を好きになれない：彼女達はオーデコロンで入浴するので淫である。このとんでもない情報の証拠として、彼は入浴中の一人の女性が載っている上海の香水店の広告を示した。彼女の横には、小机と棚の上にオーデコロンやクリームなどの入った瓶が並べてあった。

將軍はシガーを薫らしている黒人の描かれた小箱からシガーを取り出して顧問達に勧めながら言った：《これは最高のシガーで、黒人達がとても好きです》。

ある時、宴会で各テーブルに4人坐っていた。岳は自分と並んで Синани, 通訳の И.М. Ошанин, そして2人の知らない主計大尉を坐らせた。何故、突然、この大尉は位が低いにも拘らず、この榮譽を与えられたのか、誰もが理解に苦しんだ。Ильяはその理由を明らかにしようとした。その大尉は異常な才能を持っていることがわかった：彼は一風変わった助祭である父親と同様に、酔わずにとことん酒を飲むことができた。將軍はこのユニークな名人の助けを借りて、何らかの目

的で、顧問達に飲ませようと心に決めた。このような事は第二国民軍内で支配的な習慣であった。

戦闘行為が広がり、顧問達の援助が本当に役に立つことができる時になっても、彼らは相変わらず、周到に現実から引き離されていた。司令官自身、さらに彼の将校達は戦闘に於ける真の状況を顧問達に明らかにせず、不正確な情報を彼らに次々と与え、あらゆる方法で迷わせた。《全てが順調》——これが彼らの受け取る全ての情報の通常の結論であった。

私は同志達が話すことを注意深く聞いてから、開封グループの次長である Силян や Булин, Ошанин と一緒に電話ステーションに行き、開封が陥落したことを Синани に知らせ、また南部で起こっていることを彼から知ろうとした。

そこでは戦闘がなお継続中で、第7師団は、それ故、陣地を離れることができないことがわかった。Синани は私に顧問達を全員北京へ送り出すように、また作戦上のアドバイスを督弁に与えるように要請してきた。

ホテルに戻ってから、私は参謀長を呼んだ。彼はまたもや楊將軍と一緒に現われた。劉参謀長は腹臆なき話し合いをしたいと再び申し込んできた。私は同意した。だが、私は先ず、現在の状況がどうなっているか知りたいと言った。私が予想した通り、南部では一側面で勝利を得ており、戦闘は我々に優利に終結するに違いない、などと彼は言った。私は挑発的な質問をした：《恐らく、貴官はこの会談の後私を司令部に連れて行って、地図の上で部隊の配置を示してくれるでしょうね》

一残念ながら、報告は今のところまだ入っていない——と言って劉は話をそらした。

我々の《腹臆なき》話し合いはこんな具合に始まった。

一第二軍と革命ロシアとの間には堅い結束がなければならぬ、一と劉は言った一両者は将来団結して共通の敵である帝国主義と闘うために、互いに助け合わなければならない。我々は現在の苦境から脱するとすぐに、全軍を新しい原理に基いて再編成をするつもりである。そのためには、物質的な援助と同時に要員の援助も必要となるであろう。我々には優秀な軍事専門家が必要である。現在我が軍に所属している人員を全て例外なく呼び戻したい。将来、若い軍人を將軍の地位に登用する権限を顧問達自身に持たせよう。現在の將軍達は自分の職務について全く解っていない。

一未来のことは未来に話そう、一私は答えた。一今

は、現在の事を話し合おう。何だったら、現状の改善のために何かを考え出そう。これが差し迫った任務だと私は思っている。だが、具体的な提案を出す前に、私はそれ以外のことについて少し話しをしなければならぬ。

貴官は顧問の評価の点で間違っていた。少数の例外を除いて彼らは皆高度の軍事教育を受けており、また祖国で2度の戦争一帝国主義と国内一に参加した。何人かの者は広東から貴官の所へ移って来ている。つまり、彼らは中国軍の中でも働いた経験を持っている。我々顧問の助けで、広州に強力な軍隊が創設され、極めて短期間に広東省内の敵軍を全て打ち負かした。

しかし、華南での顧問の地位はことは著しく異っている。そこでは將軍は顧問の知識を100%利用している。それに反して、貴官の所で関心を持っているのは武器と弾薬のみである。貴官は顧問達の知識を利用することを望まなかった。それ故、貴官はこの丸一年間何も達成できていない。そうでなければ、貴官の軍隊内の欠点を全て解消することができたはずである。

顧問達は貴官に助力しようとしたのではないか。彼らは良い勧告を提供しようと、將軍達のあとを追ったのではないか。同志は到る所で拒否に出会った。貴官達二人は今日、彼らがどんな状態で鄭州へ到着したかを目にした。彼らは軍の義務と規律に忠実であり、常に將軍達と共にあって、どんな困難な状況下でも將軍達に助けを求めなかった。顧問達に与えられた情報は故意に誤ったものだった。戦線では全てが順調だと言われていた。しかし、軍が撤退し始めると、將軍達は悠然と自動車に腰を降ろし、そこに従卒のスペースもつくった。一方顧問達は歩いて敵から脱れざるを得なかった。果して、そのような条件の下で活動することができるであろうか。だが、この事は後にまわして、今、私は次の事を提案する。

私は Синани の軍事的才能を大いに尊敬しており、ロシアで彼のことを知っていた（実際には彼に会ったことはなく、また彼の軍事的素養についても知らなかった。だが、彼の権威を維持することが必要だと考えた）；彼は偉大な軍人で、彼の助言はいかなる場合でも、私の助言に劣るはずがない。しかし、彼がここにいないので、私が代りに督弁に尽す。貴官は多分、私のことを駄目な顧問だと言って非難することはできないであろう。私はたった今、広東からやって来た。そこでは蔣介石將軍の軍に所属する黄埔軍校で2年間勤務した。そして貴官も承知のように、この部隊は常に勝利

を得てきた。

もし貴官にとって私が必要ならば、私は貴官に次の事を要求する：第1に完全な信頼一戦線から到来する全ての情報や出される指令を私は知っておかねばならない。第2に、私は全ての作戦上の決定に加わらねばならない。言い換えると、顧問の活動のために、華南に於けると同じ条件をつくり上げることが提案する。

しかしながら、どんなにすばらしい計画を我々が立てたとしても、その実行は軍にかかっている。それ故、我々はまた將軍一人一人に顧問を派遣しなければならぬであろう。私がすでに述べた条件全てを彼らに保証しなければならないのは言うまでもない。もし誰かが現状に引き戻そうとする一我々を除外する一ならば、顧問は全員ただちに、軍事作戦に対する責任を放棄し、北京へ戻ってしまうであろう。

一私は督弁を非常に優秀な軍人として尊敬している一と劉は言った一だが、督弁は貴方が言っているようなやり方では、貴方に協力できないであろう。彼は貴方のアドバイスを言葉の上では受け入れるかも知れないが、後で全て自分流にやってしまうであろう。私は貴方が私の顧問になることを提案する。我々は協力して作戦を立案し、それを実行しよう。

一つまり、私と貴官とが坐って何かを考え出しても、督弁はそれを問題にしないでであろう。断る。私はその考えに同意しない。私は督弁の顧問にしかかなり得ない。

一督弁の同意なしでは、私は貴方に最終的な返事をする事ができない。

一督弁に取り次ぐように。

この時楊將軍が口をはさんだ。

一我々の將軍達は軍事関係のことに全く素人であるが、たとえ督弁自身に従わないとしても、恐らく顧問達の意見には耳を貸さないであろう。

一その通り、彼らは指令に従わない一と參謀長は確認して言った。一彼らと共に戦うことはできない。我々の立場が確固たるものになったらすぐに、彼らを追い出す必要がある。だが、この考えは私と楊將軍以外には誰も知ってはならないことに留意して欲しい。

一貴方の將軍達が貴方の命令に従わない場合、顧問達を批判するのは何故か、と私は質問した。

二人はさらにしばらく渋っていたが、我々は同意に達し、翌日20時に、回答を求めに私が督弁の所へ行くことになった。

岳維峻に不愉快な報告をするのを何とか逃れるために、劉は私自分が司令官に自分の意見を述べるよう私

に要請した。しかし、私は動じなかった：《私は我々の話し合いの内容を督弁に知らせておくよう、貴方をお願いする。もし彼に何かはつきりしない事があったら、我々は面談の際にその事を明確にさせよう》。

ホテルから司令部までは歩いて 20 分足らずであったが、岳は決められた時間までに私を迎えに自動車を差し向けた。我々は司令部の大きな部屋に案内された。そこは、救いようのない阿片常用者のような顔つきをした将校で一杯だった。彼らは当時の中国の典型的な職業軍人であり、いかなる思想も持たず、1カ月に5元余分に払ってもらったり、より高い地位を提供されれば喜んで自分の主人を裏切り、相手方に寝返ってしまう。彼らはこの河南の戦いがどんな風に終結するかについては、全く無関心であった。何故なら、結果がどうであろうと、彼らは自分にとって好都合な場所を見つめることができるからである。隅には長椅子があり、その上に阿片用のパイプが置かれ、その横でランプが燃えていた：時々、将校の誰かが長椅子に寝そべり、有毒の煙をうっとり吸っていた。

督弁は電話で Deng Bao San と話し合いをするために出かけた、と聞かされた。私は劉にさしあたり、地図を用いて状況を知らせてくれるよう頼んだ(因みに、司令部のどの部屋にも私は地図を目にしなかった)。劉は作り笑いを浮かべどこかへ姿を消した。楊は明らかに、自分の上司を苦境から救おうとして、ポケットから地図らしきものを取り出し、東方戦線に於ける2個旅団の配置を大胆にも、私に示し始めた。その地図を一瞥しただけで、その中に書き込まれている略号が実際の状況とは全く一致しないものであることがはっきり解った。全てが卒業試験用の一般的な戦術問題に非常によく似ていた。側面には騎兵隊がとても目立って書き込まれていたが、岳のこの戦区にはそれは全く存在していなかった。私は心の中に毒のある反論を持っていたが、督弁が急いで部屋の中へ入って来たので、それを言わずに済んだ。

岳維峻は明らかに興奮していた。そして我々に失礼すると言って長椅子に横になり、パイプを薫らした。彼はこの《重大な》仕事を終えてから、我々を別の建物へ案内し、手ずからドアに鍵をかけ、東部戦線の司令官である Tian Yu Jie に向かって雷を落し始めた。

—この馬鹿者は—岳は激怒した—開封を防衛することができなかった。あんな馬鹿げたやり方で町を敵に渡すことなど、どうして私は予想できようか。だが、全部を失ったわけではない。明日の夕方までに Deng

の師団が到着するだろう。そうすれば我々は状況を改善することができるだろう。ともかく、これらはどれも取るに足らぬ事だ。もし私が河南を失ったならば、陝西へ行く。私の軍は人員が多く、我々は常に適当な場所を探し出す。そこで再び貴方と仕事を始めることができる。

—貴官は督弁に我々の話を伝えたのですか—私は劉に尋ねた。

—ええ、手短かに、一参謀長はそっと姿を消し、ドアの外へ出た。その後、彼はひんばんに出入りしたりした。楊は会談の最中頑張ってそこにいた。

話題は再び将軍と顧問との関係に戻った。岳は自分の部下が馬鹿であることを卒直に認めた。彼らは自分が何をやっているのか解っていない。彼の命令が正確に実行されることは滅多になかった。突然、督弁は絶望的な声で言った：

—金が必要だ。

私は第2軍の代表をカラハンの所へ派遣する話へと急いで話題を変えた。

—誰を派遣するのですか—私は尋ねた。

—楊将軍が行く—岳は決断した。

—何時。

—明日。特別列車が割り当てられるであろう。

—それなら、貴方が利用していない何人かの顧問をそれに乗せて行かせよう。多分、私も行くだろう。

岳は心配になった。

—私の所に誰が残すのだろう。

—よろしい。貴方の所に顧問を一人残して仕事をさせよう。但し、過去にあった様に、撤退の際、彼を見捨てないことが条件である。

督弁は大急ぎで、今後そのようなことはないと私に請け合った：

—私が攻撃に移る時は—顧問も私の後について来る。私が車輛に乗る時は顧問も同席する。

それは広東風だと私はつけ加えて拍手を送った。

劉と楊に示した私の提案について、督弁は私の方から先にそのことを話し出すのを願って、黙っていた。だが、私はいくつかの理由から、そうしなくなかった。別れる時私は岳に言った：《私の見たところ東方戦線の状況を救うには唯一つの手段しか残されていない。つまり攻撃に転ずることである。貴方の部隊は疲労困憊している。彼らは防御では持ちこたえることができない。この方法でやってみたら》。

督弁はこの提案を聞いて、何かしら嬉しそうだった。

それは恐らく、私が昼間彼の部下と話し合った様子から、彼は私との会談が面白くないものと予想していたからであろう。しかし、彼が喜んだのは次の理由からであった：当時、中国の将校達は攻撃についておしゃべりするのが大好きであった一勿論、それは一般論の形であって、積極的、具体的作戦のことではなかった。その点で我々とは異なっていた。

次の日、督弁は500銀元を顧問達に分けるように、私宛に送って来た。私はその場でそれを送り返した。明らかに、これはある種の諂いであった。というのは、しばらくして同一人物が同じ口実で金を送ってきた。だが今回はより外交的で繊細なやり方で一同志 Синани宛に送られてきたからである。そこで И.М. Ошанин を督弁の所へ行かざるを得なかった。彼は岳の好意に感謝した後、ロシア人にそのような《贈り物》をすることは受け入れ難いことである、とはっきり理解させた。その日に私はもう2度も督弁に会ったが、我々の今回の会談では特に関心を引き起こすことはなかった。

司令官は楊を送る代りにカラハンに手紙を送った。その中で、自分、つまり岳峻維の代理人は従来通り、国民党の予右任であると書いた。

2月28日20時、私は北京へ向けて出発し、Силин を督弁の下に残した。その列車は2輛の貨車から成っていた。1輛には岳が我々に提供した親衛隊が乗り、もう1輛には引き揚げていく顧問達と何人かの中国人が乗っていた。列車のスピードを一層早めるために、中国人の一人が機関士に賄賂を10元与えた。どうもこれは当り前のことらしい。列車が黄河を渡る際、誰かに射撃されたが、その後は万事順調であった。

この何日かの絶えざるストレスに疲れ果て、列車のリズミカルな揺れに眠けを覚えながら、私はこれまでの体験を思い巡らし、極めて貴重な経験を積んだという結論に達した。今でもやはりそう思っている。私の河南への旅が迂余曲折であったことを知って、読者は当時の中国に於ける軍閥の複雑さ、馮玉祥軍内部に見られる反動的軍人の最悪の根強い習慣、ソ連の顧問達が克服することが使命であった困難な状態の深刻さをより一層実感するに違いない。

1926年3月26日、私は見たり聞いたりしたことを全て詳細なレポートにして、Лонгва に提出した。彼は、後で分ったことだが、その時すでにソ連の大使館付武官になっていた。

出張の総括として私の到達した結論がどのようなも

のであったかを、私は報告書の最後に書いた。

私の見た所、顧問達の基本的な誤りは不可能な事を引き受けたことである：少なくとも4個のグループから成る軍隊の中で中心となる1個を選び出さず、統一的な軍隊を創ること。私の意見では、寄り合い所帯の軍隊を扱う場合、その中で最も見込みのある部隊を見つけ出さねばならない。そしてそれに注意を集中し、それを中心として他の部隊を結合させる。

第2に、状況から、開封の顧問達は初めのうち指導教官よりむしろ外交官になることが必要である。彼らは將軍達や將校達と安定した関係を結ばず、すぐさま自分の直接の職務を始めようとした。

第3に、私は河南に左派が優勢を占める省政府を創るのを支援するよう提案した。というのは、督弁は明らかに住民から見て、権威が低かった。

第4に、指揮官を相手にする場合、顧問は余りにも民主的であってはならない。ソ連で創りあげられた行動の仕方を、全く異った状況の中に持ち込むべきではなかった。当地の伝統を十分に考慮に入れるべきであった。

最後に、私は次の事を提案した。河南で敗北した後、第二国民軍から引揚げようとしたことは別にして、軍内部で任務を根気強く続け、広東での経験を考慮し、А.С. Бубнов 委員会の勧告に従って、第二国民軍を指導すること。

私に託された任務の全てが実行できたわけではなかった。岳の軍隊が急いで、しかも突然撤退したからである。しかしながら、私が河南へ出張したことは勿論、それなりに有意義であった。

この間、直隸でも状況は馮玉祥軍にとって不都合なものであった。帝国主義者は彼に対抗して、2つの軍閥をうまく統合することができた：奉天派と直隸派。同時に、彼らは中国の内政に直接干渉した。3月12日、日本軍は天津付近の大沽で第一軍の陣地に射撃を加え、3月17日には帝国主義列強のグループが北京及び天津地区に於ける戦闘行為の中止を要求する最後通告を提出した。これは疑いもなく、馮の軍隊を抑えることを狙ったものであった。

一方、馮は一部の顧問の予想に反して、中国を離れるという彼の意図を実行した。ボロジンは彼と会見した際、革命的決断力を示すよう彼を説得しようとしたが、無駄だった：広汎な人民大衆及び広州政府の支持に立脚した、進歩的な臨時政府を樹立し、帝国主義者の手先である段祺瑞を追い払うことであった。馮はこ

れを行わなかった。彼はソ連へ向けて出立し、その時次のような声明を行った。自分は普通の労働者になろうと思っている。何故なら、中国では常に個人的手本を用いて教育がなされてきたからである。

馮がいなくなると、彼の將軍達はすぐに、国民軍に対する帝国主義列強の明白な敵意を弱め、列強の中立性を確保しようと努めた。彼らは相当お粗末な文書一宣言を発表した。その内容は中国をがんじがらみにしている不平等条約の全てを容認するものであった。またしても奴隸的姿勢が見られた。

1926年春、北京の国民党北方委員会は馮玉祥に、直隸軍内部である程度の反帝国主義の宣伝を行うよう勧めた。国民党員の小グループが各部隊を巡回した。彼らは演説を始める前に、その内容に関して司令部から基本的な同意を得なければならなかった。今では將軍達は軍隊内に革命思想を浸透させる、これ程弱い源でさえも断つことに決めた。

この時期、北京で《1926年3月18日事件》として中国の歴史上よく知られた、嵐のような反帝国主義運動が起こった。それはコミュニストに指導され、また先に述べた帝国主義列強の最後通告が直接の動機となって起こったものであった。この運動の指導者は中国共産党の創始者の一人であり、熱烈な革命家で信念を持った国際主義者でソ連の友人である李大釗であった。先ず最初にこの運動に参加したのは学生であった。

馮の將軍達は反動的な政治家や軍人がデモ参加者に制裁を加えるのを全く妨げなかった。そして、彼らの一人、Liming Zhuangはこの運動の弾圧に加わることをさした。

一方、何千人にも上る張作霖軍と呉佩孚軍の攻撃を止めることは、断固として革命的立場に立ち、民衆の積極的な支持を得ることによってのみ可能であった。馮玉祥の將軍達が持つ妥協、動揺、裏切りの傾向を、軍閥達はすぐさま利用した。呉佩孚軍は北京に進出し、国民軍は天津地区を見捨てざるを得なかった。

馮の將軍達は古い、この数年間の事件ですでに何度も否定されたやり方を用いて、何とか首都に踏み止まろうとした。そのやり方とは軍閥との外交的取引やそれとの連合であった。

1926年4月のある時、呉佩孚軍の2人の將軍—Jin Yun'e と Tian Weijing と協定に達することが出来たかのように思われた。しかし、呉佩孚自身が進撃中の軍隊の司令部がある保定の町にやって来て、自分の軍隊を整えた。その間すでに、張作霖との戦闘が北京の

東方で展開していた。こうした状況の下で、馮の將軍達は1926年4月16日に北京を撤退するのが良いと考えた。彼らは大した損失もなく軍を撤退させることができたけれども、彼らが引き揚げたことは馮玉祥の重大な敗北と見做された。

しかし、私は華北に於けるこれらの変化全体を目撃する機会を持たなかった。

1926年3月20日、我々全員にとって全く意外なことであったが、蔣介石は広州で反革命変革を実行し、広東政府のコミュニスト達に制裁を加えようとした。これは《3月20日事件》(中山艦事件)として中国史の中に記録されている。私は後に、この事件について詳細に語るつもりである。

《キャラバンのリーダー》として

3月21日、私はカラハンに呼び出され、広州から入手した情報を知らされた。2年間、私は蔣介石と一緒に仕事をしていたので、あの権力欲の強い、腹黒い將軍のイメージを充分心の中に思い浮かべることができた。それにも拘らず、私はショックを受けた。蔣介石がまさにこのような時に事件を起こすとは、私は全く予想しなかった：このような企みは蔣介石自身にとって利益のないことであった。中国共産党、大衆運動、ソ連との関係を絶った時、彼は何に頼ることができたであろうか。それ故、カラハンが私にむつかしい質問をした時：《蔣は最終的にコミュニストや我々と関係を絶つ、と貴方は思うか》私は確信をもって答えた：《そういうことはないと思います》。《私もそう思う》とカラハンは言った。

彼は机の引き出しから一通の電報を取り出し、それを私に差し出した。私は読んだ：《Кисанька から Сейфулин へ。チェレパノフは Ивановск が広東から戻のを北京で待つように》。確かに、待つように言われればその通り待つ。これが兵士のやるべきことである。しかしながら、この指令を実行する必要がなくなった。間もなく、私はボロジンの所へ出頭するよう指令を受けた。ボロジンは北京が陥落する前に自分は中国人の同志達と共にそこを脱出し、広州へ向かわねばならないと私に告げた。通常のルートで華南へ行くのは不可能だったので、次のような困難なルートで行くことが決定された：北京—張家口—ゴビ砂漠—ウランバートル—ウランウデー—ウラジボストク、そして海路広州へ。《貴方がこの旅行隊の隊長に任命されている。—ボロ

ジンの言葉を聞いて私は啞然とした。一今夜、我々が特別列車で張家口へ向け出発できるよう、今すぐ全ての準備を整えて欲しい。言うは易い。何しろ、我々を待ちうけていたのは文明から切り離された、全く人間の住まない地域を横断することであった。将に行われようとしているこの旅行の隊員が誰であるかということだけを私は尋ねた。その結果ボロジンとその家族、譚平山、その他7~8人の中国人であることがわかった。一この中国人達の名前を、長い時間が経って私は忘れてしまった。覚えているのは、彼らの一人がかつて孫文博士の速記者であったということのみである。決められた時間丁度に我々は張家口に向け出発した。この危険な旅行では全てが異常であった。途中で、現われるはずのない連中が同行者として我々に加わった。張家口で、彼らがコサックの隊長 Анненков と彼の参謀長である Денисов であることが解った。彼らは張家口で馮玉祥が顧問達のグループに引き渡したもので、今や彼らをソ連へ連れて行っているのは В.М. Примаков と、彼の忠実な協力者で《右腕》である Кузьмичев であった。我々はそのコサック隊長を興味深く眺めた。彼の名前は Семирежье の平和な住民を虐殺した事件と結びついていた。

だが、もう一つの驚くべき事が我々を待っていた。モンゴル人民共和国の国境近くにある小さな村で、我々は Капустин 将軍の部隊に出会った。これはかつて白軍の Колтチャク とセミョーノフ 将軍の下にあった兵士達で、当時、中国領内に逃げ込んだ連中であつた。彼らは皆祖国へ帰ることを望んだ。何故なら、彼らは内戦の時に反革命の人々に騙されたことを自覚したからであつた。しかし、ソ連の市民権を得るには、誠実な努力によらなければならなかつた。そこで彼らは馮玉祥の第一国民軍で2年間勤務を続けた。

張家口からウランバートルまで、我々は当時としては良質の自動車で出かけた。道路はゴビ砂漠を縦断していた。タイヤの下は固い平面で、まるで良質な舗装道路の上のようであつた。何故なら、そこでは絶えず吹き続ける風が砂を吹き払ったからである。ただ時折、雪だまりに似た砂山にぶつかった。大体は、パテ気味のエンジンをふかして自動車は止まることなくそれを乗り越えた。だが時には、シャベルを持って道路にとび出し、後から自動車を押した。

宿泊や昼の休止のために、我々は偶然見つけた無人の粘土壁の家を使用したり、あるいは低い草で原始的な屋根を作った。時々、私は В.М. Примаков と狩猟をす

るために先に出かけた。鷓鴣の小さな群を狙って撃った。その鳥は収獲の終わった畑に残った穀物やキャラバンの露营地での食べ物の残りを全部食べていた。狼を見かけると、我々は野原の方へ向かってそれを追跡し始めた。ある時、狐を追いかけたが、それは全くお話に出てくる評判通り、巧みに砂山の間をジグザグに逃げまわり、それから、我々には近付けないごちゃごちゃに積み上げられた石の間へ隠れてしまった。

私の一行は都市生活ですっかり甘やかされてしまった3人の中国人の活動家を除いて、皆この困難な旅に辛抱強く耐えた。朝になると、彼らはユーモアのかけらもなく英語で私に尋ねた：《ミスター チェレバノフ、私のコーヒーは何処》私は一寸苦笑した。彼らは不平を言いにボロジンの所へ走って行った。ボロジンは和解させるように私におどけて低い声で言った：《こんなことに気を使わないように。この連中は馬鹿どもだ。彼らには今まで通り丁重にしていれば、それでいいのだ》。

我々はウランバートルで短期間、休息した。ここで私は内戦時の戦友の一人、Кангелари に出会ってとても嬉しかった。彼は革命前からの党员で、医学を専攻したが、巡り合わせで基幹軍人になった。1920年、反革命ポーランド軍に対する戦役の時、彼は赤軍第10師団の参謀長であつた。彼は堂々としており、オペラに出てくるボリス ゴドゥノフに似ていた。モンゴル人民共和国は彼を自国の若い軍隊の参謀長の地位に招いた。

当時のウランバートルは勿論、現在の整備された町とは全く別のもので、普通の村のようだった。

2日経って、私は出国用ビザを手に入れるために外務省へ出かけた。私が出会ったのは大臣自身であつた。彼はまだ若かつたが、恰幅のよい人で、派手な装飾のなされた民俗衣装を着ていた。彼は通訳を通して私と長時間話しをした。最後に、ビザを与えるために私の書いた旅行隊のリストを私から受け取った。そして、私は本当に驚いたのだが、彼は極めて純粋なロシア語で尋ねた：《ボロジンとはミハイルのことではないですか。よく読めません》。

我々は4月にウランバートルからウランウデへ出発した。川の氷はバリバリと割れかけたので、板を乗せざるを得なかつた。出くわした川の一つは、その氷が解けていた。ものすごい急流で我々にはとても深かつた。もし渡れば、ラジエーターは水浸しになるので、我々は岸で立ち止らざるを得なかつたであらう。

運よく、駱駝のキャラバンが近付いて来た。私は年長の案内人の所へまっしぐらに走って行き、自動車は川の向こうへ渡してくれるように頼んだ。

—自動車1台でいくらかかるか—と私は尋ねた。

—50ルーブルだ。

とんでもない。300ルーブルは当時としては相当の額の金であった。しかしながら、我々にはここでは他の手段がなかった。財布の紐をゆるめざるを得なかった。ロープを使って駱駝は自動車を向こう岸へ渡した。

我々は行手に横たわる川の中で最も広い川、セレンガ川に到着した時、流れが氷で固められた道路を約100m下流に流し去っているのに気がついた。我々は危険を冒すしかなかった。我々は氷の張った野原を大胆にまっすぐ突走った。幸いなことに、全てうまくいった。

ウランウデで私は森にある町はずれの学校に一行を残し、自分は家を持っている人の誰かに風呂を焚いてもらうよう懇願するために、町へ出かけた。旅の泥を削り落さねばならなかった。だが、町の浴場へ中国人と一緒に行くことはできなかった：彼らに必要以上の注意を向けられてはならなかったからであった。しかし、私が帰ってみると、《文明の擁護者》は許可も、通訳もなく、自分達だけで勝手に《適当なホテル》を探索に出かけていた。このことで私がどんな言葉を発したかは、ここで公表するわけにはいかない。

私が駅で、我々に提供された特別列車を仔細に眺めていると、車輛の一つで、初老の市民が一番端のコンパートメントの入口を指さし、ある軍人とその妻にそこを占めるように言っているのを目にした。私は辛い旅でへとへとに疲れていたもので、少し荒っぽく尋ねた：《何故、貴方はここで指図をしているのか》。答えが返って来た：《それじゃ、誰が指図をすることになるのか》。この言葉は私をすっかり興奮させた。そこで、私は当惑していた2人を指さし、激しい言葉を投げかけた：《彼らが我々と一緒に行くことを許さない》。その見知らぬ初老の人は急にいきり立ち、言葉を洪水のように浴びせ始めた。《私は党の中央委員会に訴えてやる》と彼は威した。だが、私は彼の言う事を聞こうとしなかった。

間もなくボロジンが私を自分の車輛に呼んだ。すると、彼の隣にいたのは私が怒らせた相手だった。ボロジンは意味ありげに私をじっと見つめ、我々をお互いに紹介した。《この人は旅行団長で、蔣介石將軍の顧問です。どうぞよろしく》。

私は呆気にとられた。この人は私が慌てて大声で怒鳴った人だった。しかしながら、この新しい知人は友好的に言った：《我々はすでに、我々のやり方で知り合いになっていますね》。

私の友達の一で、当時常にボロジンの所において、あの激怒した鉄道員がボロジンと話し合っているのを目撃した人が後で、ボロジンの外交的手腕について私に話してくれた。ボロジンは苦情を訴えに来た人に、ソフトに且つゆっくりと次のことを説明した。私がゴビ砂漠の“すばらしさ”にほとほと疲れたこと、私が普通の下級の輸送指揮官ではなく、当時ソ連のあらゆる新聞で話題になっていた蔣介石自身の軍事顧問であること、我々の所には軍事専門家がいなくて、そこで同志チュレパノフがこの役目を引き受けてもらわなければならないこと、等々。

ソ連の人々は全て、当時、中国革命に対し大いに注目し、中国に於ける我々の行動に大きな尊敬の念を抱いていた。それ故、駅長はすぐに気持が和み、国民党を誉めそやすほどになった。しかし、ボロジンは国民党のことをかなり身近かに知っていたので、父親のようにその人に説いた：《国民党は他のあらゆるブルジョア政党と同じように、それはいくら掃除をしても、どのみち臭うトイレのようなものだ》

ウラジボストクで、私は旅行団員を汽船に乗せ、彼らに別れを告げた。私はボロジンのために一組の人員一数人のボディガード、運転手、速記者—を選び出さなければならなかった。それ以外に、広州で軍務を続けていくことを考えて、私は赤軍内にごく最近できた《砲兵中隊》について知りたかった。私はそれに関する野外演習を、軍団長フェルマンと師団長ニキチンの許可を得て、第一太平洋師団Верхнеудинск連隊で見学した。私が3年後にこの師団を指揮する名誉を与えられようとは、当時私は思い及ばなかった。私はまた、ウラジボストクのПашковскийが校長となっている歩兵学校を訪れ、ここで教育課程の編成を学んだ。これは黄埔軍校で役に立ったに違いない。

私はブリューヘルと一緒に広州へ戻ることになった。彼は再び軍事顧問団長のポストに就くために、そこへ向かうところであった。私は駅で彼を迎えた。彼は列車から降りると、私を心から抱きしめ、それから、自分の家族—妻のГалина Павловнаと子供のСеваとЗояを紹介した。

汽船の上で彼はいつも何かの資料を非常に綿密に研究していた—当時、党内でなされていた激しい議論の

資料集を彼が研究していたのであった。

飽き飽きする程長い船上での時間をつぶすために、我々はよくカード、特に《66》をやった。私は組になった Галина Павловна と共に、汚い手を使い、いんちきをしたことを白状する。我々は前以ってサインのシステムを申し合わせておき、それを使ってお互いにカードを出す順番をこっそり教え合った。この様にして、我々はブリューヘルとその《戦友》に次々と《毛皮外套を重ねた》。ブリューヘルは明らかにじりじりした。彼は負けるのがとても嫌いだった。彼がチェスの対局で不利な局面になると、仕事の上で至急仕上げねばならない事があるかのような振りをして、席を立つことを私は以前から気がついてきた。戻って来ると彼は言ったものだった：《私はどうも自分の構想を全て忘れてしまったようだ。もう一度やり直そう》—そして、チェスの駒を崩した。《66》のゲームでも同じで、彼は負けを取り戻したいばかりに、いつまでも勝負を続けようとした。結局、昼と夜の食事は約2時間遅れた。私と Галина Павловна はいんちきをやっても無駄骨だということが解った。そうこうするうちに、ブリューヘルは気がついて、我々にごまかさないうちでやるように言った。

この船旅の途中、突然、私は全く予期しない《役割》

を引き受ける羽目になった。顧問 Н.И. Кончиц の妻 Елена Сатурниновна が4才の娘 Соня と2才の息子 Володя を連れ、我々と一緒に船客であった。彼女は船酔いに苦しみ、ベッドから降りなかった。そこで、子供達の世話をすることが私の責任になった。こうなって初めて、子守りをするのは国民党の将軍の所で顧問になるよりも、私にとっては容易でないことが解った。

とても活発な女の子の Соня は1日に20回も甲板に飛び出したり、母親の所へ行ったりした。その子は自分で着物をちゃんと着ることができず、私に向かってかん高く、元気に叫ぶだけだった：《おじちゃん、着せて》。心の中で、この世のあらゆるものを呪いながら、私は子供服のボタンを不器用にはめたり、はずしたりした。

こんなひどい世話をしながら、一日の海の行程は過ぎて行った。真面目なことを言うならば、私はこの旅の間中ずっと、広州で私がどんな事に直面するかを考えていた。国民革命軍の幹部ともう一度適切な関係を打ち立てるために、私は自分のいない間に広州で起こった、嵐のような事件を詳しく究明する必要がある。